□研究会 Seminar

アメリカの社会とポピュラーカルチャー

〈第 4 回研究会〉

ポピュラーカルチャーにおけるラティーノ性と黒人性の競合
――ヒップホップからレゲトンまで

講師：三吉美加（東京大学・立教大学 兼任講師）
コメンテーター：倉田量介（東京大学［ほか］非常勤講師）
司会・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：生井英考（立教大学教授、アメリカ研究所所長）
日時：2012 年 6 月 30 日（土）15:00-18:00
会場：立教大学池袋キャンパス 7 号館 7201 教室

〈第 5 回研究会〉

日本のファッションにみるアメリカの影響
――洋装化、ジャパン・ファッションの衝撃、
ストリートファッションの現在

講師：渡辺明日香（共立女子短期大学准教授）
コメンテーター：田中里尚（文化学園大学准教授）
司会・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：生井英考（立教大学教授、アメリカ研究所所長）
日時：2012 年 7 月 28 日（土）15:00-18:00
会場：立教大学池袋キャンパス 11 号館 A303 教室

立教大学アメリカ研究所は、2011 年度に引き続き「アメリカの社会とポピュラーカルチャー研究会」を 6 月と 7 月に開催した。各回の報告内容について、簡単に紹介する。

6 月の第 4 回研究会では、三吉美加氏が「ポピュラーカルチャーにおけるラティーノ性と黒人性の競合――ヒップホップからレゲトンまで」と題し、ニューヨークに住むプエルトリコ系やドミニカ系の若者の人種観やエスニック的アイデンティティに対するヒップホップの影響について発表を行なった。三吉氏はまずアメリカに早くから移住していたプエルトリコ系と 1980 年代以降に流入が本格化したドミニカ系の間ではスペイン語の使用に対する抵抗感が違うことや、両者の愛憎相半ばする関係を解説した。またプエルトリコ系、ドミニカ系、アフリカ系アメリカ人が生活圏としているハーレム、ワシントンハイツ、イーストハーレム、そしてサウスブロンクスの 4 地区は「一つの空間」という意識で捉えられていて、そこでは各集団間で日常的に活発な交流があり、強い仲間意識で結ばれていることが紹介された。これらのコミュニティに住む多くの子供たちは、放課後アフタースクールなどに通い、同じエスニシティの先生からヒップホップやメレンゲ、

バチャータといったエスニックダンスを学んでいる。ここに見られる世代間の繋がりは、年長者が年少者の面倒を見るというカリブの文化的習慣に基づいているが、自らのルーツの文化を伝承する過程で子供たちをしつけ、ストリートから遠ざけるという機能も果たしていることは大変興味深い。

続いて三吉氏はギャングが跋扈していた 1970 年代のニューヨークにおいて、暴力を音楽やダンスで解決しようとする積極的な働きかけがあり、その中心にいた人達がヒップホップ創成期の担い手であったことを概説した。その後、「語り」に長けているジャマイカ系とアフリカ系アメリカ人が自分たちの言葉の伝統を再認識し、ラップなどを通してその価値を高めていく一方、ラティーノが提示した特長が身体性であったことが報告された。プエルトリコ系やドミニカ系は馴染みのあるサルサ、メレンゲ、バチャータ、ボンバなどのダンスを集団の文化資源としてヒップホップに意図的に取り入れ、独自の身体表現で自分たちの民族的な価値を底上げした。さらに彼らは複数のエスニシティが混淆するヒップホップ空間においては、「ブラック」という連帯意識も感じており、「アフロ・ドミニカン」や「アフロ・プエルトリカン」といったエスニシティ区分で自らを認識する若者が増えていることが指摘された。このように複数のアイデンティティを時と場によって器用に使い分けている現状が描出され、ヒップホップが彼らの人種観に与えている影響の大きさを垣間見る事ができた。

休憩を挟み、カリブ海地域をフィールドとして研究を続けている倉田量介氏によるコメントがあり、ヒップホップの捉え方や身体性について検討が加えられた。続いて行なわれた質疑応答では、ジェンダーに関する問題や商業主義の影響などについて多角的な質問が相次ぎ、予定時間を超過するほどの活発な議論が展開された。

翌 7 月末に開催された第 5 回研究会では、1994 年から東京都内（原宿・渋谷・銀座・代官山）でストリートファッションの定点観測を続けている渡辺明日香氏が日本のファッションにみるアメリカの影響について、150 枚以上のスライドを用いて発表を行なった。

渡辺氏ははじめにアメリカにおけるファッションの歴史について、ヨーロッパのスタイルを模倣していた 19 世紀から、カジュアルで機能的なアメリカ的ファッションが求められる時代を経て、多くのアメリカ人デザイナーが世界的に活躍し、新たなビジネスモデルを創り出すに至った過程を振り返った。

続いて戦後日本のファッション史について、年代毎に詳細に解説した。1950 年代にはアメリカン・ルックの影響を受け、日本人の「アメリカ化」が進み、1960 年代にはヒッピー思想の流入や若者文化の台頭があり、アイビー・ルックやモッズ・ルックなどの新しいファッションが広まった。続く 1970 年代はフォークロア・ファッションなどのドレッシーなスタイルが流行する一方、反戦運動を契機としたナチュラル志向の広まりも見られた。そして 1980 年代には三宅一生、山本耀司、川久保玲といったデザイナーが従来の西洋服の既成概念を打ち破る作品を提案し、欧米のファッション界に衝撃を与えた。

さらに最新ファッションの提案主体が映画、テレビ番組、雑誌、ブランドだった時代から 1990 年代以降はより身近な街の人が参照源となり、下から上へと向かうストリートファッションの影響が登場し、新たなファッション構造が展開されたことを論じた。

渡辺氏による発表の後、日本のファッション雑誌の研究を進めている田中里尚氏が雑誌メディアにおける動きを中心にコメントを提供し、日本の雑誌がどのようにアメリカのファッションを参照していたかを時代を追って検証した。またアメリカの雑誌が日本のファッションを参照している現状も紹介され、日本からアメリカへのベクトルの存在を指摘した。

引き続き行われた質疑応答では、ストリートファッションについて多くの質問が寄せられ、渡辺氏から、かつては分類しやすかったが、最近は一つの系統に括りにくいファッションが増えていることや、都内 4 地区での定点観測では 2000 年代初頭まではっきりしていたエリア毎の違いがなくなりつつあることが報告された。また購買意欲を刺激し続ける旧来のファッション・システムに対して、そこから逸脱するような装いが散見され始めており、現状は新たなファッション・システムが出るときの前段階に近いとの認識が示された。

第 4 回研究会の発表をもとに三吉氏から本誌に寄稿していただいた文章を以下に掲載する。

（文責：奥村理央）